

映画ってホント、いいものですね

小泉 ひろみ

(秋田県医師会 会長)



コロナの流行で、なかなか映画館に行けませんでした。映画館で映画を観るのは「特別感」があり、電話や宅配などで気持ちが途切れることもなく映画の世界に没頭することができて好きでした。亡くなった両親は、夜、家に子どもたちを置いて、「内緒のところ」と言って2人で出かけることがありました。子ども心に、「2人で映画を観に行っているんだなあ」とわかってきていました。特に父は映画好きで、小さいころ「家で映画を観たい」と思っていたそうです。私は今回のお盆休みに、ハードディスクに録画していた映画の1つを観ました。家で観るのも悪くないものです。

今回観た映画は「Codaコーダあいのうた」という題名で、2022年のアカデミー賞では作品賞をはじめ3部門を受賞したアメリカの映画でした。両親と兄が聴覚障害者で、その子だけが健常者である女子高校生のお話です。CODAとは、Children of deaf adultsの略でもあり、音楽記号で「楽曲の最後の部分」の意味でもあります。その女の子は、歌が好きでしかも才能がありましたが、幼い頃から聞こえる自分が聞こえない家族を支えてきていたので、自分の進みたい道に進むべきかどうか、悩みます。最近、注目されるようになってきた「ヤングケアラー」でもあるわけです。最後には、歌の道に進むことになりすし、聴覚障害の兄が1歩進み出そうとしている姿もあり、観客はほっとするわけですが、現実にはこれからまだまだ大変な困難もあるかと思いました。

さて、最近、聴覚障害の方を描いた映画やドラマが結構ありました。このことが気になる前

も「聲の形」というアニメは観ていました。あえて気になり始めたのは、「LOVE LIFE」という日本の作品からです。主人公の女性は、健常者の現在の夫とは、お互いの顔も見ずに会話をしたりしていますが、聴覚障害の元夫とは、手話を使って視線を交わし合っていていたのが、印象的でした。さらに、その後、人気俳優の目黒蓮さんが若年発症型両側性感音難聴で、高校卒業のころから聴力を失った若者を演じたTVドラマ「silent」も非常に評判を呼びました。すぐその後に、吉高由里子さんのドラマでも聴覚障害の方が準主役でした。NHKでは、ろう者の父とコーダの娘との関係を描く「しずかちゃんとパパ」が9月まで放送されていました。私は、「一般社団法人手話秋田普及センター」から、冊子「See～聴覚障がい児・者を見る（災害対応編～）」への挨拶文を書く依頼を受けて書きましたが、このように多くの方が色々な障害や特性に目を向けるのは、大変重要な事だと思います。最近目にする機会が増えている「ヘルプマーク」も、もっと広く知られるといいなと思っています。ヘルプマークは、外見でわからない病気や障害のある方が、他の方にそれを知ってほしい場合につけています。私の外来に来てくださっている発達障害の方や場面緘黙症の方の中で、あった方がいいかなと思う方へお勧めしています。

さて、私の映画体験についてです。私は、東京で大学生活を送りましたが、色々な友人を得ました。その中の1人が京都出身の女性で、本当によく一緒に映画を観ました。それまでの私が秋田で見る事のなかったポーランド映画



や、スウェーデン映画、イタリア映画など、ハリウッド映画ではない世界の映画を観に、小さい映画館を探して行きました。アンジェイ・ワイダ監督、アンジェイ・ムンク監督、イングマール・ベルイマン監督、ルキノ・ヴィスコンティ監督、デシーカ、フェリーニなど巨匠の監督たちをはじめとして、様々な映画を観ることができました。当時は、むさぼるように、これらの映画を観ていたように思います。今それらを観たらどう感じるのかを知るのには怖い気もしますが、また観てみたい気持ちもあります。当時は「自分のこれまでの生活と違う」と感じ、違う考え・違う感性を、映画を通じて得たように思います。そのため、日本映画はあまり観ていなかったかなと思います。今は日本映画も観ますし、ドラマもよく観るようになりました。

これまで観てきた映画で好きだったと思う映画をいくつかあげるとしたら、「2001年宇宙の旅（『時計仕掛けのオレンジ』つきで）」、「ギルバート・グレイプ」、「モーターサイクルダイアリーズ」等でしょうか。これらを思い返すと、当時の気分を今思うのであって、高齢になった現在観たら違和感もあるかもしれませんね。

その中の1つ、「モーターサイクルダイアリーズ」を紹介します。若き日のゲバラの旅の映画です。彼はアルゼンチンで医学生だったのですが、友人と南アメリカをバイクで旅に出ます。その中で、若き日のゲバラは自分の血のルーツを意識し始めます。ペルーのマチュピチュ遺跡での光景は印象深いものでした。インカ帝国の遺跡ですが、マヤ文明、スペインの侵略などの歴史を知ることによって、南アメリカ固有の民族の血を意識することになります。この旅の後、彼は革命に身を投じることになります。私は、どうしてもマチュピチュに行きたくなりました。ゲバラをもっと知りたくなりました。

その頃、同じ病院の知り合いの看護師さんが、JICAで中米のグアテマラに行くことになり

ました。壮行会で皆「遊びに行くよ」と言いましたが、彼女は「そう言っても、誰も来ませんよね」と。そう言われると「絶対行く」と思うのが私です。ただ、グアテマラは政情が不安定で普通に観光客が行くには危険もあると聞き、スペイン語を勉強しなくてはいけないと思いました。スペイン語の練習のためもあり、グアテマラに行く前の年にペルーに行きました。ペルーは、観光立国ではないかと思うくらい、観光客に良い国です。そこで、マチュピチュに行くことができました。「モーターサイクルダイアリーズ」でマチュピチュを見ていたので、大変感激しました。ゲバラが映画で寄り掛かった壁も見ることができました。

翌年、グアテマラに行き、看護師さんに会うことができました。その方に、常に守っていただきましたので、私がスペイン語を使う必要はほとんどありませんでした。スペイン語つながりで、その後キューバに行きました。ゲバラが成したかったことの一部でも見たかったからです。キューバに行った当時は、キューバとアメリカの間に国交がなく、アメリカから直行便では行けませんでした。カナダからキューバへ乗り継ぎました。首都のハバナの町には、アイスクリーム屋さんチョコレート屋さんもありました。観光客と住民では、値段が違っていました。世界のいろいろな国で、旅行者に金品を乞う人々がいますが、共産国家であるキューバでも、少数ですがいました。表面上だけかもしれませんが、夜でも通りや海岸で人々がダンスしたり音楽を奏でたり、そぞろ歩く人々が印象深かったです。お金がなくても、生活していくには大丈夫なのかもしれません。無事、ゲバラのお墓参りができました。ゲバラが描いた理想の姿がそこにあったかどうかは、わかりません。ただ、アメリカという大国のお膝元で、カリブの明るさと緩さを保って存在している国のしたたかさは、感じました。